

令和 3 年 6 月 16 日現在

機関番号：32607

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K10484

研究課題名(和文) 出産直後の母親が「必要としている支援」を捉える助産師のケア技術の検討

研究課題名(英文) Midwife care skills for 'mother support needs'

研究代表者

和智 志げみ (WACHI, SHIGEMI)

北里大学・看護学部・講師

研究者番号：70410173

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、出産直後の母親が「必要としている支援」を成し遂げるための助産ケア技術の明文化とケアモデルの作成である。助産ケア技術には、1) 支援の目標は、母親が自信を持ち成長することと設定する。2) 母親と児の対象像を捉えて支援の方向性を定める。3) 母親と関わりながら対象像を変化させ、具体的な支援方法は相互の関わりの中で決めることを心がける。4) 母親の身体的な苦痛や思いをその表情や身体動作から察して代弁、身体接触しながら、苦痛や思いを共感する。5) 沈黙を作る、低い体勢や距離を取るにより、母親の発言や質問を引き出す。等が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

助産ケア技術は「母親に寄り添う」と抽象的に表現され、伝承することが難しい状況にある。Benner(2006)は、臨床実践能力の向上のためには、経験豊富な熟達者の経験値を伝承することが必要であり、そのためには見えにくいノウハウを見えるものにする重要性を述べている。実践の場面を丁寧に記述することは、助産師と母親との間で繰り広げられる様々な相互行為を明らかにし、今まで説明がされてこなかった実践の様相を描くことで、助産師教育への応用や助産師の実践能力の向上、さらには母子ケアの向上に貢献できると考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to describe midwifery care skills and create a care model for "mother support needs": Focusing on interactions between mothers and midwives assisting lactation during early postpartum. In midwifery care skills, 1) The goal of support is the mother to be confident and grow. 2) Determine the direction of support by grasping the target image of the mother and newborn baby. 3) Change the target image while interacting with the mother, and try to decide the specific support method in the mutual relationship. 4) I sympathize with the pain and feelings of the mother while recognizing the physical pain and feelings of her mother from her facial expressions and physical movements and making a proxy talk and physical contact. 5) Bring out the mother's remarks and questions by creating silence, keeping a low position and distance. etc.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：助産師 産褥早期 授乳場面 助産ケア技術 相互行為分析

## 1. 研究開始当初の背景

出産直後は、妊娠分娩に伴う母体の生理的变化が非妊時の状態に回復するまでの状態であり、この時期は、増大した子宮が妊娠前に回復すると共に、内分泌の変化により乳汁産生が開始するなど身体的変化が著しい。さらに家庭環境・生活パターン・社会環境など母親を取りまくあらゆる状況が変化し、心理・社会的にもストレスのかかりやすい時期であり、育児をとおして母親としての意識を発展させ、母親役割を獲得していく重要な時期である。Rubin(1997)は、「母親になるプロセスにおいて、出産直後に周囲からの援助を受けることにより、母親としての役割にスムーズに移行できる。」ことを指摘している。近年、産後のうつ病や新生児への虐待など、産褥期におけるメンタルヘルスの問題は深刻化している。竹田(2016)は東京都医療監察医院との共同で、2005～2014年の10年間に東京23区で発生した妊産婦の異常死を分析し、この間に63例の自殺が起こっていたことを発表した(妊娠中23例、産褥1年未満40例)。さらに産後に自殺した6割が産後うつ病をはじめとする精神疾患を有していたことが報告されたことから、出産直後の母親への身体的・心理的・社会的支援のあり方を検討することは、重要な課題である。 出産直後の母親の特性として、Klaus(2001)は、「新しく母親となった者は子どもの世話に追われ、自分のニーズや感情を認識し、自分から進んで援助を求めることが難しい状況にあり、自分が疲れているという知覚や混乱しているという感情を認識することが困難な状態にあること。」を指摘している。すなわち、母親の特性として、表現する言葉や行動だけで、「母親が必要としている支援」を捉えることは、難しいことが推察される。 助産師には、「女性の妊娠、分娩、産褥の各期において、自らの専門的な判断と技術に基づき必要なケアを行う」責務がある。出産直後は、母児共に身体的・心理的・社会的状況が刻々と変化する時期である。特に女性が母親役割を受け入れていく心理的過程と密接に関連する授乳支援場面での助産師のケアは重要であり、助産師には母児の状況を的確に捉えて、援助するケア技術が求められている。ケア技術に関して明らかな定義はないが、Mayeroff(1993)は、「一人の人格をケアするとは、その人が成長すること、自己実現することをたすけること。」と述べている。また、Wiedenbach(1984)は、「技術とは、対象が要求したり、欲したりするものを与えようとする行為を伴うひとつ一つのプロセスであり、個別性を持つ行為であり、対象との一対一の関係の中で行われるもの。」と述べている。両者の提言から、ケア技術とは、人が成長すること、自己実現することを助けるために、個々の対象が必要なものを与えようとする行為を伴うひとつ一つのプロセスであると考えられる。したがって、授乳支援場面における助産師のケア技術とは、単に授乳姿勢の方法や抱き方などの手順を示すことではなく、「個々の母親が必要としている支援を捉え、母親役割を受け入れていく心理的過程の促進に寄与するケア提供のプロセスであり、母親と助産師との関係の中で行われるもの。」と考える。

## 2. 研究の目的

出産直後の授乳支援場面において、「母親が必要としている支援」を捉えるために、熟達助産師がどのようなケア技術を用いているのか明らかにし、出産直後の母親の特性を踏まえたケアモデルを作成することである。

## 3. 研究の方法

### データ収集

助産師が行っている出産直後の母親への支援の場面を調査し、収集した動画内の(会話を含む)助産師と母親の活動内容・活動の形・会話内容、会話の形を詳細に記述する。

#### (1) 研究方法

施設に出向き施設の管理責任者、調査方法、倫理的配慮、手順、条件などについて打ち合わせを行い、詳細は決定した。

研究対象者：授乳支援場面の相互行為の観察を行うため、助産師と母親の2者である。

助産師は日本助産評価機構クリニカルラダーレベル 認定者(出産直後の母親と新生児ケアを自立して実践できるレベル)。母親は、正常分娩後(正期産、経腔分娩、母児同室可能、クリティカルパス適応者)であること。

研究対象者への説明：母親は、ビデオ撮影であることを考慮して調査の方法やデータの取り扱いについて十分に理解が得られるよう複数回にわたって説明し、調整する。妊婦健診が実施される産科外来に調査概要を示した掲示をする。入院時に調査に関して概要を説明したうえで、詳細の説明と同意を得る。助産師は、ビデオ撮影であることを考慮して調査の方法やデータの取り扱いについて十分に理解が得られるよう説明したうえで、同意を得る。

データ収集場面：出産施設において研究協力に同意が得られた助産師と出産後の母親の授乳支援場面50場面。

データ収集方法：小型のビデオカメラ2台による映像撮影と小型ICレコーダーによる音声録音と研究者の参加観察および助産師への聞き取り、データを詳細に書き起こす。

データ収集時の倫理的配慮：データ収集は個室で行い、母親の休息や面会等に支障をきたさないこと、助産師の業務支障を来さないことを考慮する。

## データ分析

エスノメソドロジ的相互行為分析の手法を用い、母親と助産師のケア場面の分析し、熟達助産師が行っている出産直後のケア技術を明文化し、ケアモデルを作成する。

### (2) 分析の実施

出産直後の授乳支援場面において助産師がケア対象者の母親のニーズに志向していく相互行為が母親と助産師の発話と身体動作によって組み立てられていく仕方を明らかにする。

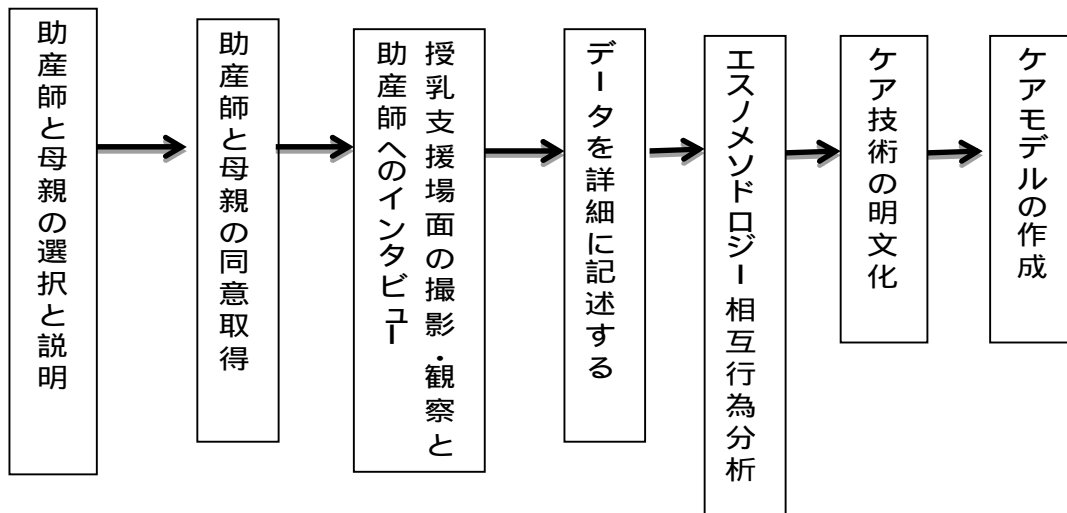
#### 分析の手順

動画と会話のデータを主に会話分析の手法を用いて分析する。単に会話だけでなく視線や、身体の動き、指さしやジェスチャー、うなずきなどの身体行為や会話をしながら使っている道具やその場の空間要素なども会話を理解する上で重要な情報として分析する。会話分析は会話を構成するための主要な手続き 順番交替 行為の連鎖 修復等に注目する。

### (3) ケアモデルの作成

前年度までの相互行為に関する分析と助産師のインタビュー内容(行為の理由)から、「母親が必要としている支援」を捉える助産師のケア技術がどのように構成されているかを検討し、ケアモデルを作成する。

## 図1. 研究の手順



### (4) 倫理的配慮

北里大学看護学部の研究倫理審査会で承認を受けて実施した(承認番号:29-4-4)

## 4. 研究成果

### (1) 対象の概要

10組(助産師10名母親10名)10事例から「母親が必要としている支援」が成し遂げられていた15場面を分析し、助産ケア技術の特徴を明らかにすることができた。事例5を例に述べる。

### (2) 事例5の概要

助産師I:40歳代後半、助産師経験20年。母親J:20歳代前半の初産婦、妊娠及び分娩経過は異常なく、正期産で男児3300gを出産した産褥3日目。「母乳栄養の意向(直接授乳)が強く、かなりこだわっている人である。乳頭は短く、乳房緊満感が強く、直接授乳には介助が必要である。」と報告があった。助産師は母親の意向に沿って、直接授乳ができるように授乳前の乳輪部のマッサージを実施し、乳輪部が柔らかく、痛みを伴わず、乳汁が分泌する変化を感じるようになった。その後はマッサージを継続することで、直接授乳ができるようになった。

この事例について、エスノメソドロジ的相互行為分析とインタビューによる助産師の行為の意図の解釈を統合させ、助産師は、「母親が必要としている支援」を成し遂げるためにどのように助産ケア技術を提供しているのかに焦点をあてて分析し、取り出した助産ケア技術の特徴を以下に示す。

助産師は、授乳前には3日目(翌日退院予定)で自宅に戻るにあたっての目標を定め、本人が納得できるように支援することを考えていたが、具体的な支援方法は本人と相談しながら決めることを考えていた。授乳前には対象像を「こだわりのある人」と否定的に捉え、授乳の前半では乳房の状況から直接授乳は難しい予測していたが、母親に関わる中で「真面目で研究熱心な人」と判断し、マッサージを含めた授乳方法を教えることで、自分で育児を考えることが

可能であると判断していた。母親は体で痛みを表現し、助産師は乳房痛を代弁することにより、母親の辛さを受けとめ、終始母親に視線を向け、うなずきと共に肯定的な評価を続け、痛みの和らぐ方法を提案し、母親はそれを受け入れマッサージを続け、助産師は母親に乳房の変化の確認を促し、母親は確認するという、助産ケア技術を提供しながら、「乳房痛を表現し、直接授乳をしたい」という気持ちを支えていた。

つまり、助産師は、母親が自力で授乳できるよう目標を定め、母親と新生児の対象像を捉え、支援の方向性を定め、具体的な支援方法は相互の関わりの中で決めることを心がけていた。そして、母親と関わりながら先に捉えた対象像をつくり変え、身体的な苦痛をその表情や身体動作から察して代弁し、身体接触し、痛みを共感していた。関わりでは、否定的な表現を用いず、肯定的な表現で授乳手技の評価を伝え、母親の意向に沿った支援を提供し、「母親が自信を持って育児ができることを目指した支援」を成し遂げていた。

### (3) 助産ケア技術の特徴

同様に10事例15場面を分析して取り出した助産ケア技術の特徴を以下に示す。

- 1) 支援の目標は、母親自身が自信を持ち、成長できることであると設定する。
- 2) 母親と新生児の対象像を捉えて、支援の方向性を定める。
- 3) 母親と関わりながら対象像を変化させ、具体的な支援方法は相互の関わりの中で決めることを心がける。
- 4) 母親の身体的な苦痛や思いをその表情や身体動作から察して代弁、身体接触しながら、苦痛や思いを共感する。
- 5) 沈黙を作る、低い体勢や距離を取るにより、母親の発言や質問を引き出す。
- 6) 否定的な表現を用いず、肯定的な表現や婉曲的な表現で授乳手技の評価や助言を伝え、母親との関係性を構築し、母親を傷つけない配慮をする。
- 7) 授乳方法に関しては、母親の体感に基づいた方法で教示する。
- 8) 母親の意向に沿った支援を提供する。
- 9) 支援の評価は、支援の目標に照らして母親と新生児の状態や状況から判断する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 和智志げみ
2. 発表標題 『母親が必要としている支援』を成し遂げるための助産ケア技術 産褥早期の授乳場面における助産師と母親との相互行為に関する分析から-
3. 学会等名 第34回日本助産学会学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	島袋 香子  (SHIMABUKURO KYOKO)  (70206184)	北里大学・看護学部・教授   (32607)	
研究分担者	香取 洋子  (KATORI YOKO)  (90276171)	北里大学・看護学部・教授   (32607)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------